氏　　名　濱田　陽（はまだ　よう）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第174号
学位授与の日付　平成15年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目　諸宗教・無宗教の共存
——インターレリジアス・エクスピアリアンスの仮説——

論文調査委員　（主査）教授 宮本盛太郎　教授 中西輝政　教授 大澤真幸
教授 山折哲雄(国際日本文化研究センター)

論文内容の要旨

本論文は，「諸宗教・無宗教の共存」を主題とし，その探求のために，宗教学，宗教対話研究の立場から出発しつつ，その限界を見据えて，事例研究と理論的課題の論究を通じ，新たな研究対象と研究枠組みを提示しようとする野心的な試みである。以下，本論文の内容を要約する。

まず，申請者は，序章において，宗教，文化の複数性及び無宗教について論じ，諸宗教と無宗教を併せて扱う立場を明らかにしている。

第1章において，宗教の無宗教への対話失敗の典型例として，日本のキリスト教徒によるキリスト教式結婚式の普及を宗教社会学的に分析している。1970年代のカトリック教会とローマ教皇庁の対応，1980年代のプロテスタント界に於けるキリスト教ブライダル宣教団の役割に焦点をあて，両キリスト教界の「無宗教」社会への特殊化した関わりを，徹底した調査に基づいて「対話」の失敗した例として論じている。

第2章において，国際関係における宗教対話組織に目を向け，世界最大の宗教対話NGOであるWCRP（World Conference on Religion and Peace）と長い歴史をもつIARF（International Association for Religious Freedom）をとりあげ，宗教対話組織がインパクトをもちえていない原因，及び，改善すべき点を批判的に考察している。公式宣言文の分析，世界会議への参与観察，国際委員会事務局インタビューから，無反省的な国連支持，代表制の問題，コミュニケーション・ギャップ，過密スケジュールなどの問題点を浮き彫りにし，特に代表性の問題については，参加していない宗教教団への働きかけ，無宗教者への働きかけの二つが決定的に欠けていることを明らかにしている。さらに，付節で宗教対話の先行研究をまとめている。

第3章からは，社会現象や組織から，個人的経験を扱う研究に移行している。エルサレムの宗教対話組織エライジャ・スクール学術プログラムとICCI（Interreligious Coordinating Council in Israel）関係者の対話経験をインタビューによって収集し，経験の抉出を試みている。契機面において，宗教，文化を契機とする場合と，宗教，文化以外を契機とする場合の二つに分け，さらに前者について，自らの宗教を契機とする場合，他者の宗教を契機とする場合，自らの宗教と異なる自らの一部（家族的，文化的要素）を契機とする場合の三つに分けて，四つの理念型を用いて分析している。この作業により，複数宗教の多様性を確認している。

第4章以降，文献研究により，諸宗教・無宗教の複数的経験を探求している。第4章は，ヴィヴェカーナンダ，ガンディー，遠藤周作，ダライ・ラマの四つの事例から，その複数的経験が成立するときの状況及び特徴を，試論的に抽出し，カリスマの役割の他，対話を求める衝動の起原として，「見えないもの」（unseen）による呼び声，帰属意識の欠如，人間の不完全性の意識，信頼形成の願いなどを見出している。

第5章においては，第3章，第4章で模索した諸宗教・無宗教の複数的経験をインターレリジアス・エクスピアリアンス

（IRE＝inter-religious experience）という，申請者が新たに設けた仮説概念によって定義し，理論的考察を行なっている。

「インターレリジアス・エクスピアリアンスとは，自身の宗教性，文化性，あるいは，無宗教性に根ざすことで，必然的に，他の宗教，文化，無宗教に関わる経験であり，そうすることで，相互の限界や葛藤を回避し，互いに生産的な寄与をなしうるものである。これは，継続的営みであり，経験綜合であって，経験の全体を通じて，ある種の普遍性を獲得する」というものである。そして，宗教的経験（RE＝religious experience）とIREを，「見えないもの」（unseen）や他者との関係で比較している。申請者は，このTREが三つの綜合性を有するとしている。すなわち，1「経験」一般の綜合的性格（一般の経験自体が，感性的直観と諸概念の合成物であること），2「見えないもの」の綜合性（unseenが非合理性と合理性をもつ綜合物であること），3綜合的経験性（信仰，思想，行為のひとまとまりのセットであること）の三つである。そして，IREの研究では，IREの契機，内容，効果を扱い，資料の「個人」性に留意しつつ，感情注入作業によって，経験を抽出し，認識の流れを創造することになると方法を述べている。

第6章においては，IREの仮説概念と研究枠組を用いて，マザー・テレサの祈りと行動を分析している。

終章においては，宗教，文化の複数性をアメリカ合衆国の現状から考察し，ガンディーの複数宗教に関わる経験の特徴を素描して，その現代的意義を論じている。とくに，ヒンドゥー教の信仰から他宗教の尊敬に至るガンディーの信仰及び行為を，綜合的にとらえる視点をIREとして探索している。

以上の論究過程により，申請者は，主題「諸宗教・無宗教の共存」の探求に不可欠な概念仮説として「インターレリジアス・エクスピアリアンスの仮説」を導出し，その有効性を検証しているのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，「諸宗教・無宗教の共存」の可能性をインターレリジアス・エクスピアリアンス（inter-religiousexperience）という新しい概念に基づいて構築しようとするすぐれた試みである。申請者は内外における多くの事例を徹底的に調査し，宗教的対話組織に参加し，文献研究を行い，深い思索に基づいて分析のすぐれた枠組みを提示している。理論的枠組みとして提示されるインターレリジアス・エクスピアリアンスとは「自身の宗教性，文化性，あるいは，無宗教性に根ざすことで，必然的に，他の宗教，文化，無宗教に関わる経験であり，そうすることで，相互の限界や葛藤を回避し，互いに生産的な寄与をなしうるものである。これは，継続的営みであり，経験綜合であって，経験の全体を通じて，ある種の普遍性を獲得する」と定義されるが，この枠組みを用いて分析されたマザー・テレサの例は本論文の白眉である。

申請者によれば，マザー・テレサのミサには，無限者とマザー・テレサとの関係（X→M）とは別に考慮しなければならない第二の側面がある。つまり，マザー・テレサの祈りの中で，「傷ついたキリスト（x）が，彼女が心に思い描く人（neighbor＝N）に接近する側面があり，これを申請者は（x→N）と図式化している。そして，このXMとxNが，マザー・テレサの胸中で並立することで，具体的活動に二重の推進力がもたらされる。興味深いのは，この時点以降，XはNに，Mはxに関係し，マザー・テレサ（M）と人（N）は，媒介なしに対峙していることである。つまり，マザー・テレサは無に近い状態でそのままの人に対峙し，そこから，その人がヒンドゥー教，イスラム教，仏教，キリスト教，無宗教という属性をもつことのかけがえのなさを把握する。例えば，自分の「死を待つ人々の家」で看取った人を，その人自身の宗教形式によって葬る。ヒンドゥー教徒はガンジス川で火葬し，イスラム教徒にはコーランの一節を唱える。このような実践を最高度の宗教的自由の感受性をもってつらぬくのである。

本論文は，単なる宗教学の論文ではなく，国際社会における宗教的組織の意義と問題性についての鋭利な分析も行っている。平和を目的とした最大規模の宗教対話NGOであるWCRP（World Conference on Religion and Peace）と，宗教的自由を活動課題とするIARF（International Association for Religion and Peace）を取り上げ，組織の公式文書の分析，会議への積極的参加体験，事務局へのインタビューによる貴重な情報に依拠して，組織の問題点を浮き彫りにすると共に，これらの組織の再生のための方策として，共存と対話のネットワークを妨げる障害の除去のためには，組織に関わる宗教者と組織外の宗教者，無宗教者が共通の認識を共有することを提言している。国際的組織における世俗と宗教の鬩ぎ合いのダイナミックな分析は，すぐれた宗教社会学的分析のみごとな例である。

申請者の鋭い問題意識と方法的一貫性には目を見張らせるものがあり，独特の視角から本論文各章に書かれていることを

一般化して考えると，宗教のみならず多文化主義の本質にも関わってくる問題が取り上げられており，現代社会を考える上で極めて重要な問題を追及しているといえよう。多くの研究者が，そうした問題の存在に気付いていながら正面から論じなかった問題を，独創的な視角から挑んだ力作であるといえる。

しかも，本論文は，単に宗教間対話のみを扱っているだけなのではなく，序章で内村鑑三の例を象徴的に引用して，西洋の宗教，文化の影響の中での近代以降の日本の諸問題を自覚し，さらに「無宗教」という日本の現代社会を考える上で欠かせない要素を積極的に論じている。そして，無宗教者のキリスト教結婚式の事例，日本の宗教教団が大きく関わっている宗教対話組織の例を詳細に分析している。さらに，インターレリジアス・エクスピアリアンスという概念構成そのものにより，西洋から移入された宗教学，宗教対話という学問の限界を見据え，日本社会の足場から，共通の通用概念を探求しているのである。

以上の様な特質を有する本学位申請論文は，国際化の時代における日本文化研究を目指す文化・地域環境学専攻日本文化環境論講座にふさわしい内容を備えたものといえる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成14年11月20日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。